

扁平足（へんぺいそく）

扁平足は足のアーチ構造が失われて土踏まずが失われるような変形をいいます。小児期から生じるものや成長期に生じるもの、また



成人してから生じるものなどがあります。何れもインソールなどにより土踏まず部分の落ち込みを支えることが初めの治療となります。また、足部の筋肉の訓練なども行われます。このような保存治療によって改善が見られない場合には原因や重症度に応じた手術治療が行われます。左は荷重時の足部 X 線写真です。重症化すると足の骨が足底に向かって凸型に出っ張るような変形が生じ、変形は船底変形と呼ばれます。

と呼びます。

1、成長期の扁平足

成長期にみられる扁平足例の多くに外脛骨（副舟状骨）がみられます。外脛骨は舟状骨の内側に存在する過剰骨で、10～20%程度の頻度で存在します。この骨の存在によって後脛骨筋腱の機能に影響が出ると扁平足に関わると考えられています。外脛骨の形状や年齢によって舟状骨と外脛骨の骨接合を促す処置や、外脛骨の切除と後脛骨筋腱の前進術（舟状骨に縫いつける処置）が行われます。



2、成人期扁平足

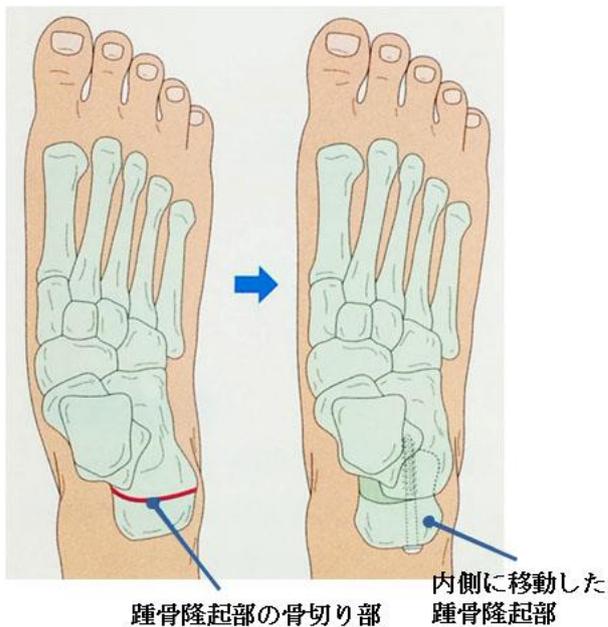
成人期にみられる扁平足では後脛骨筋の腱鞘炎や腱の変性断裂などがみられます。右は後脛骨筋腱の腱鞘炎をきたした例です。腱周囲の貯留液がみられます。腱鞘炎の段階では腱鞘滑膜切除術を鏡視下で行うことが可能です。

腱が断裂している場合には長趾屈筋腱を用いて腱移行による後脛骨筋腱機能再建を行うことがあります。足底の靭帯（スプリング靭帯）が切れてしまった場合には骨構造の矯正手術が必要となります。



踵骨隆起内側移動骨切り術

踵骨の後方部分を内側に移動する手術です。踵骨隆起部を骨切りして内側に移動します。関節の固定が生じないため、足部の動きは温存されます。前足部の外転変形を矯正する効果は少ないため、中等度の扁平足に用いられます。



手術前（中等度の扁平足）

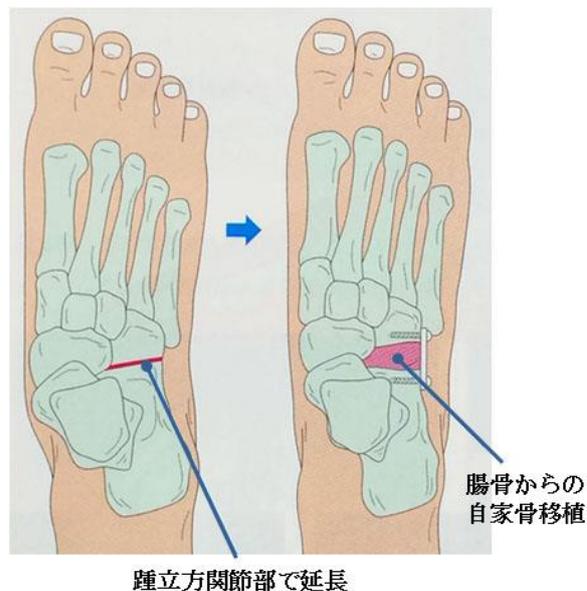


踵骨骨切り術後

メジカルビュー社 図説足の臨床より

外側支柱延長術

足の外側部を延長する手術です。踵立方関節部あるいは踵骨の前方に自家腸骨を移植して、足のアーチ構造の外側を伸ばします。矯正力は優れていますが、通常は踵立方関節部分に自家腸骨を移植して踵立方関節固定術を行いますので、内がえし・外がえし運動が固くなります。重度の変形では踵骨隆起内側移動術と同時に行うこともあります。



手術前（重度の扁平足）



外側支柱延長+踵骨骨切り同時手術

メジカルビュー社 図説足の臨床より